

PP985 生体部分肝移植後の消化管出血:

平田 勝, 針原 康, 久富伸哉, 三浦泰朗, 佐野圭二, 菅原寧彦, 日下浩二, 窪田敏一, 高山忠利, 幕内雅敏
(東京大学肝胆膵人工臓器移植外科)

【はじめに】末期肝臓病患者においては, 食道胃静脈瘤などの消化管出血の原因となる病変が高頻度に見られる。生体部分肝移植後の消化管出血について検討した。【対象】1996年1月から1999年12月までに当科で生体部分肝移植を施行した77例を対象とした。原疾患は胆道閉鎖症48例, 原発性胆汁性肝硬変11例, 肝硬変8例, その他10例であった。【方法】移植前1ヶ月以内に行なった上部消化管内視鏡検査における所見と移植後の消化管出血の頻度を比較した。【結果】77例のうち, 移植後消化管出血を認めた症例は9例(11.7%)であり, 移植前食道胃静脈瘤を認めた症例の中で6例(11.3%), 認めなかった症例の中で3例(15.0%)であった。消化管出血の種類は食道胃静脈瘤6例, 胃十二指腸潰瘍2例, 結腸多発性潰瘍1例であった。食道胃静脈瘤出血の6例のうち2例は急性門脈血栓症に先行して出現した。消化管出血の出現時期は平均術後20.3日であった。18歳以上では28例中7例(25.0%)に消化管出血がみとめられたのに対し, 18歳未満では49例中2例(4.1%)と有意に低頻度であった。

PP986 慢性膵炎治療における自家膵島移植の有用性:

高橋 毅, 谷岡康喜, 辻村敏明, 岩永康裕, 藤野泰宏, 鈴木泰之, 具英成, 黒田嘉和
(神戸大学第1外科)

【緒言】慢性膵炎患者の膵全摘術後には, 外科的糖尿病が必発である。これに対し欧米では, 自家膵島移植の有用性が報告されているが, 本邦においては未だ確立された方法とは言い難い。今回我々は, 自家膵島移植の一例を経験した。この患者の術前後の膵内分泌能を比較し, 自家膵島移植の有用性を検討した。【症例】41歳の男性。膵頭部の腫瘍形成慢性膵炎に対し, 幽門輪温存膵頭十二指腸切除術を受けるも, 再度膵炎による疼痛と耐糖能の低下を認め膵全摘の適応となった。摘出膵をRicordiらの方法を用いて消化し, 得られた膵島を上腸間膜静脈分枝より肝に自家移植した。【結果】摘出膵は約35gで, 高度線維化を認め, 膵島収量は4700IEQに留まった。術中術後を通じ, 膵島移植による合併症は認めなかった。C-peptide値(ng/ml), グルカゴン値(pg/ml), 一日インスリン投与量(IU/day)はそれぞれ術前0.72, 154, 17, 術後1ヶ月目で0.21, 41, 20であった。【結語】慢性膵炎患者の治療法として, 膵全摘自家膵島移植を安全に施行でき, 術後の内分泌機能の廃絶を回避しえた可能性が示された。手技の簡便性, 安全性の面からも, 積極的な臨床応用が考えられた。

PP987 腎移植後に合併した興味ある消化器癌5症例の検討:

田代裕尊¹⁾, 丸林誠二²⁾, 春田直樹³⁾, 渡邊浩志⁴⁾, 片岡 健⁵⁾, 清水洋祐⁶⁾, 池田 聡⁷⁾, 片山幸治⁸⁾, 板本敏行⁹⁾, 杉野圭三¹⁰⁾, 八幡 浩¹¹⁾, 浅原利正¹²⁾, 福田康彦¹³⁾, 土肥雪彦¹⁴⁾
(広島大学第2外科¹⁾, 県立広島病院²⁾)

当施設では168例の腎移植を施行し, 5例に消化器癌を認めた。症例1: 23才男性, 腎移植3ヶ月目, 出血性胃潰瘍にて胃切除を施行したが, 術後急性心不全にて死亡, 病理解剖では胃形質細胞腫であった。症例2: 37才男性, 腎移植9年後, 胆嚢癌を認め, 動注療法を施行したが, 3ヶ月後に死亡した。症例3: 55才男性, 腎移植術後18年目, 肝細胞癌と診断するも, 2ヶ月後に死亡した。症例4: 35才女性, 腎移植22年目に, 肝細胞癌と診断のもと開腹下MCTを施行したが, 1年8ヶ月後に死亡した。症例5: 53才女性, 腎移植後, 8年目早期左乳癌にて非定型的乳房切断術, 11年S状結腸癌でpolypectomyを施行し, 現在生存中である。結語: 腎移植後の消化器癌では, 予後は極めて不良であり, 長期生着例では, 悪性腫瘍も念頭においた綿密なフォローが必要であると思われた。

PP988 Hepatic neutrophil sequestration in liver ischemia:

Chen Yu Xin¹⁾, Sato Motomichi¹⁾, Abe Yasuhito²⁾, Miyauchi Katsutoshi¹⁾, Kohtani Takashi¹⁾, Kawachi Kanji¹⁾
(愛媛大学第2外科¹⁾, Department of Pathology I²⁾)

【Objectives】Influences of FK506 and gadolinium chloride (Gd) on hepatic neutrophil and the production of IL6 and IL8 were investigated. 【Materials and Methods】Total hepatic ischemia was induced for 90 minutes in rats. Control (C), FK506 (F), and Gd groups (G) were included. Serum transaminases, ketone body, IL6, IL8, and liver histology were assessed 1 hour after reperfusion. Rat survival was determined for 7 days. 【Results】Serum GOT, GPT, and LDH were significantly higher in group C. Arterial ketone body ratio was lower in groups C and G. FK506 and Gd induced decreases in hepatic neutrophil infiltration and IL8 production and an increase in IL6 production. Rats survived longer in groups F and G (F: 15/19; G: 16/20; C: 12/20). 【Conclusions】FK506 and Gd eliminate hepatic ischemia injury by reducing neutrophil infiltration in liver tissue and the production of IL8. FK506 increases production of IL6.

PP989 ラット上腸間膜動脈虚血再灌流モデルにおける血清NOx量変化と肝組織iNOSmRNA発現に関する検討:

羽田原之, 甲斐敏弘, 竹元伸之, 神崎雅樹, 曳野 肇, 住永佳久, 宮田道夫
(自治医科大学大宮医療センター外科)

【目的】上腸間膜動脈虚血再灌流モデルラットで血清NOx及び肝組織iNOSmRNA発現の関与につき検討する。【方法】SDラットにて以下の各群で血清NOx量及び各種サイトカインを測定した。また肝組織のRNAを抽出, RT-PCR法にてiNOSmRNAの発現を調べた。1) control群, 2) 単開腹(Lap)群, 3) LPS腹腔内投与群, 4) 上腸間膜動脈虚血再灌流(I/R)群, 5) I/R後LPS腹腔内投与(MOF)群。【結果】血清NOx量(pmol/10µl; mean±SE)はa) control群(n=6)(90.77±11.31) b) Lap群(n=4)(60.81±9.54) c) LPS群(n=3)(1023.58±887.23) d) I/R群(n=7)(179.58±30.60) e) MOF12時間経過群(n=7)(1651.84±527.26) f) MOF24時間経過群(n=6)(1745.31±441.12) g) MOF36時間経過群(n=4)(530.50±235.67)であった。肝組織中iNOSmRNAはcontrol群, Lap群で発現を認めるが, MOF群では認められない。血清TNF-α, IL-1β, IL-6, IL-10, IFN-γはI/R群, MOF群で上昇した。【総括】MOF群では著明にNOxが産生されており, MOFモデルにおける臓器傷害にNOおよび活性酸素が関与している可能性が示唆された。またMOF群では肝組織iNOSmRNAの発現が認められなかった。

PP990 侵襲に対するHepatocyte Growth Factor発現の意義—開胸手術症例とラット肺虚血再灌流モデルの検討—:

山田高嗣, 久永倫聖, 中島祥介, 金廣裕道, 青松幸雄, 高 濟峯, 長尾美津男, 橋川幸弘, 池田直也, 鹿子木英毅, 中野博重
(奈良県立医科大学第1外科)

【目的】肺再生に関与するHGFに着目し, 開胸手術侵襲と肺障害・再生との関連について検討した。【方法】開胸食道手術の血清HGFを測定し肺切術と比較。また, ラットの左肺門をクランプすることにより肺虚血再灌流モデルを作製し, 血清・組織中HGF蛋白, mRNAを測定。肺再生への影響を評価するため中和抗体を投与し, 肺上皮細胞のDNA合成を検討。【結果】肺切術の血清HGFは変動を認めなかった。食道手術では術後1日をピークに緩徐な増加を認め, 肺炎合併例では高値遷延した。ラット肺虚血再灌流群の血清・組織中HGFは, 単開胸群に比して有意に高値を示した。mRNAは術後1日に障害肺において過剰発現を認め, 肺胞マクロファージにHGFの濃染を認めた。HGFの中和抗体により肺上皮細胞のDNA合成は有意に抑制された。【結語】開胸食道手術において, 血清HGF値は手術侵襲による肺障害を反映するのみならず, 術後肺炎の早期診断に有用であることが示唆された。ラット肺虚血再灌流モデルにおいて, HGFは障害肺の再生に重要な役割を果たすことが示された。